

“The Atrocity Exhibition” J. G. Ballard

(日本語訳: 塔公少年 <http://tavola-world.seesaa.net/>) Japanese translated by Tagong Boy, Oct. 2016

第一章 The Atrocity Exhibition

< 注釈 >

「黙示録」

・エニウェトク環礁 (Eniwetok) :
太平洋上、マーシャル諸島にある環礁。ハワイとフィリピンを結ぶ線上のちょうど中間位に位置する。ここは核実験場としてや、1952年に世界で最初の水爆実験が行われた場所と知られる。第一次世界大戦のはじまった1914年に日本が占領し、1920年に委任統治領となり太平洋戦争では激戦地となった。

・ルナ・パーク (Luna park) :
南極大陸をのぞき世界各地で展開されている、月旅行をテーマにした遊園地チェーン。20世紀初頭にかけて人気を博したが、現在は閉園しているものも多い。アメリカはNY、コニーアイランドが発祥の地。日本では東京浅草と大阪にもあった。

「浅草ルナパーク (1910-1911)」は日本最古の遊園地「花屋敷 (浅草五区)」の隣、浅草六区に造られたが火災のため一年も経たずして閉鎖。大阪のルナパーク (1912-1923) は新世界に建設され、初代通天閣とロープウェイで繋がっているという不思議な場所だった。今ある通天閣は二代目。たしかにあの一带は奇妙な雰囲気が漂っている。

・memo :
バラードは、エリザベス・テイラーやフロイト、J.F.ケネディなど、執筆していた頃に最も関心の高かっただろう、時代を象徴する人物を小説の中に登場させることが多い。それを踏まえると、この「Apocalypse」に登場する、'Catherine Austin' という名前は、女性作家のキャサリン・マンズフィールド (Katherine Mansfield) とジェーン・オースティン (Jane Austen) を連想させるし (キャサリンは、KとCを置き換えている)、'Dr Nathan' は多分、ロスチャイルド家の名を世界中に知らしめたネイサン・メイアー・ロスチャイルド (Nathan Mayer Rothschild) からきているように思った。上にある訳ではネイザンと濁らせた表記にした。発音が近い「ネイサン」だとしても「姉さん」と言葉が重なり悪そうないメージがわかないので。

「精神崩壊にいたるまでの覚書き」

・先カンブリア時代の三葉虫 (a pre-Cambrian trilobite) :
三葉虫が現れたのは「カンブリア紀」からとなっているので、バラードは意図的に「先カンブリア」と書いたのかそれとも勘違いなのかは分からない。

・1945年8月7日の正午に撮影されたエジプト、カタール低地 :
ここで記される限定した日にちと場所にどうの意味合いがあるのかはわからないが、この日は8月6日広島に原子爆弾が投下された翌日にあたり、その報道が全世界で一斉になされ、世界中の人が核兵器の恐怖を知った日。バラードは「核」により地球 (世界) が草すら生えない不毛の地になったことを示したかったのかもしれない。

・ファット・ボーイ ('Fat Boy') :
長崎に落された原子爆弾は「ファットマン」。

黙示録 (Apocalypse.)

毎年開催されるこの展覧会で人々を不安に落しいる呼び物といえば (患者たちはこの展覧会には招待されなかった)、世界の大動乱をテーマにした絵に大きな関心がゆく。まるで長い監禁状態におかれた患者たちが、彼らを見る医師や看護師らの心のなかに、ある地殻大変動を感じているかのようだった。

キャサリン・オースティンは、改装された屋内競技場の中をぐるっと歩いて回り、これらの奇妙なイメージ群を目にしたのだった。エニウェトク環礁とルナ・パーク、フロイトとエリザベス・テイラーが混然となった絵は、トラヴィスのオフィスにある脊髓図解を写したスライド・フィルムを思い出させた。それらは解けない夢を表した記号のようにエナメルの壁に吊り下がっていた。彼女が (自ら) 進み、意図どおりの役割を演じはじめた悪夢を解くための鍵として。ゴールドのキャップをつけたタバコを、片方の鼻孔に突っ込んだDrネイザンが近づいてくると、彼女はすまし顔で白いコートのボタンを留めた。

「ああ、オースティン…、ここにある絵をどう思うかね？ まるで地獄で繰り返される戦争じゃないか」

精神崩壊にいたるまでの覚書き (Notes Towards a Mental Breakdown.)

精神異常発症者を記録した映画フィルムのノイズ音が、トラヴィスのオフィス下にある階段教室から徐々に大きくなった。机の後ろにある窓に背をむけたまま、彼はここ数ヶ月の間、骨を折り集めた最終書類の整頓をした。

- (1) 太陽の反射分光写真。
- (2) ロンドン、ヒルトン・ホテルのバルコニー・ユニット正面図。
- (3) 先カンブリア時代の三葉虫の断層面。
- (4) エティエンヌ＝ジュール・マレーによる連続写真。
- (5) 1945年8月7日の正午に撮影されたエジプト、カタール低地の砂海の写真。
- (6) マックス・エルンスト作「Garden Airplane Traps」の複製画。
- (7) 広島と長崎に投下された原子爆弾「リトル・ボーイ」と「ファット・ボーイ」の信管配線図。

書類の整頓を終え、トラヴィスは窓の方を振り向いた。いつものように、白のボンティアックが彼の真下に見える混み合った駐車場に停まっていた。車中にある二人の人物が、うっすらと色づいたフロントガラス越しに彼を監視していた。

内的世界 (Internal Landscapes.)

トラヴィスは、左手の震えを押さえながら、向かい側に座る肩のやせた男をじっと見た。誰もいないがらんとした廊下から、まぐさ (明かり取り窓) 越しに入る光は暗いオフィスの中を照らした。男の顔は飛行帽のひさしで部分的に隠れていたが、トラヴィスはアールズ・コートにあるみずぼらしいホテルの寝室にまき散らかっていたニュースウィークとパリマッチの破りとられたページに載っていた爆撃機のパイロットの顔を思い出した。トラヴィスをじっと見つめる男のまなざしは、絶え間ない努力によってのみ維持していた。どういうわけか、男の顔の各面は交差しそこになっていた。それらの正しくあるべき分割が、まだ目には見えない特性として一部生じたかのようだった。つまり、男の性格や筋肉組織によって形成された必要要素以外の不可欠要素によって。

なぜこの男は病院へやってきたのか？ 30人の内科医のなかに混じったトラヴィスを見つけだすために？
トラヴィスは男に話しかけようとした。しかし、その背の高い男は、器具用キャビネットのそばでボロ服をまとったマネキンのように立ったまま何も応えなかった。男の未熟ではあるが同時に年を重ねた顔は、石膏マスクと同じようにこぼれた風にも見えた。

数ヶ月が経ち、トラヴィスは数多くの短編ドキュメンタリー映像の中で、肩をフライング・ジャケットにねじこみ独り寂しくたたく男の姿を目にしていた。男の姿は、戦争映画のエキストラとして、あるいは眼震について見事に仕上げた眼科用フィルムに映る一人の患者としてだった。抽象的な風景の断片にも似た巨大な幾何学モデルの連なりは、彼らの先延ばしにしていた衝突が、まもなく起こるだろう事をトラヴィスに気づかせ不安にさせた。